

のんた

7

山口の土地改良

vol.7

Spring 2005

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう!

●巻頭特集

21世紀土地改良区創造運動

子どもたちの体験を通して

夢のある豊かな

農業・農村づくりのために!

教えて!

ほ場整備つてどうして必要なの?

入選作品のご紹介

食料・環境・ふるさと

写真コンテスト

講演記録

「村の原風景を取り戻せ」

ふるさとを写真で写し、

俳句を詠もう

周南市立四熊小学校の取り組み

やまぐちの野菜シリーズ

旬の野菜暦

21世紀土地改良区創造運動

ご報告します！県内各地で大好評



子どもたちの体験を通して ～夢のある豊かな 農業・農村づくりのために～！

土地改良区「水土里ネット」では、その機能や役割を地域住民や社会にPRするため、「21世紀土地改良区創造運動」を展開しています。2004年度に実施された県内各地の水土里ネットの取り組みについてご紹介します。

水土里ネット秋穂 (6/8)

大海小学校5年生33人を対象に体験学習を実施しました。まず厚狭高校の児玉先生が「メダカの生態について」特別事業を行い、その後子どもたちは現地に出かけてため池の役割を学び、続いて「天田川」でさまざまな生き物の採集・観察を楽しみました。

ため池って、こんな役割もあるんだ。



1年間の感謝の気持ちをこめてまごころこめて料理を作りました！

防府水土里ネット

「稲刈り体験&お米感謝の会」

(10/13・11/8)

10月には佐波小学校5年生72人を対象に、手刈りによる昔の稲刈りの苦労と機械による効率の良い収穫との違いを体験する学習会を開催。11月には佐波小学校主催で防府水土里ネットなど関係者を招いた「お米感謝の会」が開かれ、子どもたちが作った料理をこっそりになりました。収穫米の大半はPTAに販売。売り上げは新潟中越地震の義援金としました。



水土里ネット豊浦 (2/22)

町内にダムが1カ所、ため池が397カ所もある旧・豊浦町。誠意小学校4年生45人を対象に、体験学習を実施しました。子どもたちがまず向かったのは「八王子ため池」で、水土里ネット豊浦の林理事長が「土地改良区は、農業に最も大切な水の管理をしています」とあいさつ。続いてきれいに改修された「石印寺ため池」を見学した後、「舟郡ダム」へ。水は人々の苦労によって得られる貴重な資源であることを学びました。

ダムの水はみんなにとって大切なんだ。



さあ、準備はいい？
田植えを始めるよ！

防府水土里ネット

「米づくり学習会&田植え体験学習」

(6/17～18)

佐波小学校5年生73人を対象に「米づくり学習会&田植え体験学習」を開催しました。1日目は「水の大切さ、米づくり」について学習。2日目は防府水土里ネットが管理する佐波川総合堰などを訪ねた後、PTAも参加して田植えに挑戦。協力して目的を達成する喜びを学びました。



やった～っ！

1等賞の

新米ゲット第一号！



お母さんと一緒に、よ～いしょ！

水土里ネット小行司

「稲刈り体験&収穫祭」(10/3)

当日は農事組合法人小行司において「稲刈り体験&収穫祭」が開催され、町内外からたくさんの人々が訪れました。稲刈り体験では、水土里ネット小行司の組合員などが、のこぎり鎌による手刈りに四苦八苦する参加者をフォロー。その後、抽選会が行われ、1等賞を獲得した人は小行司産米ひとめぼれの新米が贈られて大喜び。そのほか名物パンダ焼きや鶏肉の炭火焼きなど、参加者の皆さんは小行司の味に舌鼓を打っていました。



一般の部
最優秀賞

県知事賞
『出漁』 油谷町掛淵(現 長門市)
宮崎 茂(油谷町)
朝焼け、川霧が立ち昇る寒い朝の出漁風景です。



一般の部
優秀賞

県土連会長賞
『みどりの田園』 徳地町島地
大和正憲(山口市)
里山のふもとへ(棚田)作付けされたみどり色の稲。よく日光を受けている、かやぶきの水車小屋が田園風景をつくり出している。
〈表紙の写真〉



地球人会議会長賞
『波紋』 油谷町後畑(現 長門市)
岩本 進(周南市)

棚田の風景を撮るため待機していましたが、一心に田の苗の手直しをしている人が目にとまりシャッターを押しました。田の水面の波紋が印象的でした。



一般の部
佳作



『棚田を愛する老夫婦』 油谷町後畑
串岡妙子(下関市)
棚田で畑仕事をしていた老夫婦が仲よくひと休みです。



『楽しい田植体験』 油谷町東後畑(現 長門市)
山岡保治(須佐町(現 萩市))
諸外国50ヶ国の大使夫妻を招待して親善の田植体験が行われた。終始笑い声が絶えない雰囲気だった。短い時間ながら広い棚田で楽しんでおられた。

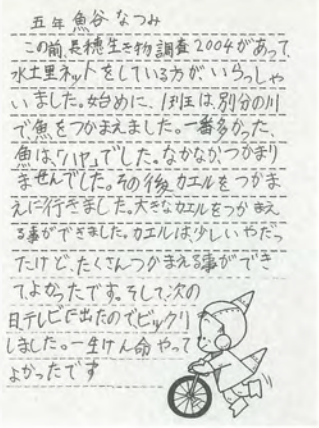


『メダカとり』 徳地町
松永常男(宇部市)
美しい彼岸花の帯が続く小川で子供たちがメダカ取りに夢中でした。ぼうやの袋にはメダカがいっぱい。徳地町は自然に恵まれ、素晴らしい環境だと思います。



平成十六年度
食料・環境「水・土・人・暮らし」
ふるさと写真コンテスト

山口県内の農山漁村の良さを再発見していただくとう「水・土・人・暮らし」をテーマに、平成16年7月から12月にかけて『食料・環境・ふるさと写真コンテスト』を開催しました。県内各地から寄せられた応募総数295点のうち、農山漁村の風景や人々の暮らし、伝統文化などを撮った入賞作品21点を誌上で御紹介します。お楽しみください。



田んぼの生き物調査に参加したのは、長穂小学校3〜6年生38人。水路での魚の採集・観察からスタートした後、カエルの採集に挑戦！ムギツクやシマドジョウなども「発見」して、子どもたちは田んぼや水路にたくさん生き物が棲んでいることを学び、生き物との触れあいを楽しんでいました。



シマドジョウです！
これがムギツク！



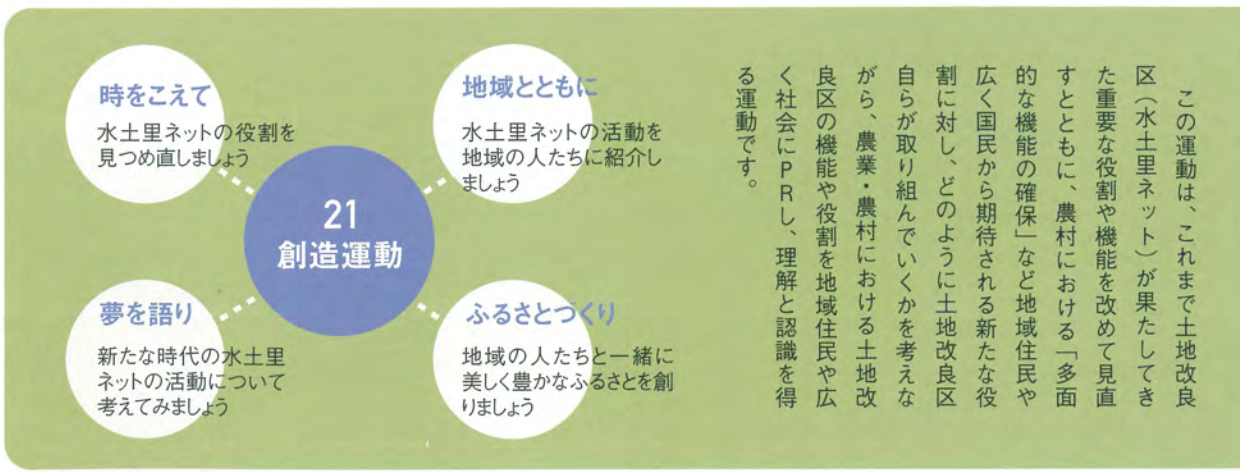
えっ？
ほら、ここにお魚がいるよ！



バケツ稲の稲刈りです。
珍しい形の水路に
子どもたちは興味津々！
メダカさん、ふるさと水路に戻っても元気に育ってね！

農地再編整備事業で水路を施工するに当たり、メダカたちを神玉小学校に引っ越しさせ、以来、同小学校の子どもたちが1年間、飼育にあたってきました。そして環境に配慮した工法による水路が完成した5月、新しい水路へメダカたちを放流。10月には神田小学校5年生を対象に「ミニ稲刈り」体験学習を開催。子どもたちはバケツで育てた稲と田んぼで育てた稲の違いを学びました。

水土里ネット豊北
『めだかの引っ越し作戦』
『お米を収穫するまでの苦労と対策』
(5/25・10/22)



21世紀土地改良区
創造運動って？



児童・生徒の部

最優秀賞

『木がたおれてできた土かべ』 周南市四熊下
酒井貴大(周南市・小学6年)

台風ですごく高い木が土と根と一緒に倒れています。土のかべのようで僕の身長より大きかったです。5・6年生のみんなが倒れた木の上に乗っています。



『春よ来い』 豊田町(現 下関市)
住田 茜(山口市・中学3年)

私は枯葉が燃えていく香が好きだ。そのにおいは、やがて沢山の
新芽ぶく春が近いことを予感している。



『なれた手つき』 宇部市丸尾漁港
石井友唯(宇部市・中学3年)

とてもたくさんアナゴをさばいているおばさんの手さばきが
すごく撮影させてもらいました。年末でにぎわう市場での一
コマです。



『上関の夕日』 上関町
西本宗矢
(田布施町・小学3年)

八島からの帰りの船から撮りました。
とてもゆれたので苦労しました。

主 催／ 食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議
水土里ネット山口
後 援／ 山口県、中国新聞防長本社、山口新聞社
協 賛／ 富士写真フイルム株式会社
株式会社 山口フジカラー

児童・生徒の部

平成十六年度

食料・環境「水・土・人・暮らし」 ふるさと写真コンテスト



Furusato Photo Contest



『オアシス』 むつみ村(現 萩市)
三浦玲子(萩市)

一本の幹に出ている樹液にちようちよかなぶんが集まっていた。
まるで森のオアシスだと思いました。



『青のりどり』 豊北町栗野川(現 下関市)
三嶋 光(下関市)

よく洗ってから家に持って帰りますが、又それから干すまでが大変と言
っておられた。



『白水カーテン』 美東町太田川
山野博人(下関市)

食料を求めにやってきた青サギ。水の流れとの対比が美しかったです。



『としゃくで遊ぶ子供達』 楠町万倉(現 宇部市)
楠田敏治(宇部市)

あまり見かけなくなったとしゃくを見かけ、そこで遊んでいる子供達を
発見、撮影しました。こういった風景を残してほしいですね。



『早朝のイトトンボ』 楠町万倉(現 宇部市)
永富賢治(宇部市)

自宅近くの田んぼで撮影。稲の葉のしずくにイトトンボが近付いてい
ます。田んぼの緑を強調してシャッターを切った。



『よっこらしょ』 油谷町東後畑(現 長門市)
斉藤勝美(山口市)

ご夫婦で苗の補植をしておられたところですが、ちょうど体形がシル
エットになってその少し曲った腰の状態で作業の様子が見えてくる
ような気がしませんでしょうか。



『干潟の休日』 宇部市東岐波
吉田健次(山口市)

干潟は色々な形を作って見る人を楽しませてくれます。休日には子供
達も親に連れられて訪れますが、子供達が安心して遊べるきれいで色々
な生物のいる干潟を大切にしたいものです。



『夕照』 油谷町後畑(現 長門市)
山野博人(下関市)

夕日が棚田を照らし、とても美しい光景でした。



一般の部

入 選



『里の秋』 美祿郡秋芳町
中尾勝規(下関市)

毎年9月23日の秋分の日には彼岸花を撮影に行くのですが、今年は暖
かかったので少し早く9月20日に行ったのですが、それでも2〜3日遅
かったみたいです。



『クヌギの植林』 周南市鹿野
山本由里子(周南市)

林業研究グループの交流会に小学生一人お母さんと参加されました。
とてもうまく植えていました。



『ウニをとる』 油谷町青村海岸(現 長門市)
藤永知巳(油谷町(現 長門市))

ウニとりの解禁日に海女さんの仕事の様子を撮影した。



Q 教えて! 「ほ場整備」って どうして必要なの?

県内各地で進んでいる「ほ場整備」。でも、農業者以外の人には、ほ場整備が何のために必要なのか、十分理解されているとは言えません。高齢化や過疎化によって耕作放棄地が進む農村の現状、将来を見据えての地域づくりのためにも必要なことなど、「水土里ネット大和」の取り組みから見た「ほ場整備」の必要性・目的・効果などについて、「第19回山口県土地改良推進大会」における水土里ネット大和・土井健生事務局長の意見発表から再構成してご紹介しましょう。

東荷地区の 取り組み

- 右上 東荷地区全景
- 左上 花部会による出荷作業
- 右下 大豆の耕作
- 左下 大豆(サチユタカ)



Q ほ場整備の目的って、何なのですか?

A 矮小で不整形なほ場のために農作業が楽に行えず、将来に向けての農地保全が難しくなることが予想されるほ場を、整備することによって農地保全の心配をなくしていくというのが、第一の目的です。

ほ場整備の重要な目的は、農村部におけるインフラストラクチャーの整備。私たち東荷地区のほ場整備の総予算は、約17億円少々。でも、このほ場整備事業によってできた道路整備を、もしも土木関係の公共事業で整備した場合は、約20億円が必要だったのではと聞いたことがあります。そうすると、ほ場整備による道路整備は、考えられないほどの利益を地域住民にもたらしたと言えます。

Q 実際に、ほ場整備をした今、どう感じていますか?

A これまでの矮小で不整形であったほ場が大区画となり、農家自身の農作業が楽に行えるようになったのはもちろん、営農組織の介入が容易となって、将来の農地保全の心配がなくなりました。

Q そもそも、なぜ農事法人を設立することになったのですか?

A 東荷地区のほ場整備が採択されたころの事業は「県営担い手育成基盤整備事業」といって、きちんとした土地利用調整と集積を行い、なおかつ担い手の確保をしなければならなかった。しかし、私たちのような山間の、しかも兼業農家ばかりのところでは、それは非常に難しい問題です。その問題をクリアしたのが「農事組合法人づくり」の設立でした。



土井健生事務局長

Q 利用調整と集積と担い手の確保は、どうやって可能に?

A ポイントは3つあります。まずひとつは「穏やかな農地集積を図った」ということです。当地区は、自分の田んぼの米くらいは、自分で作りたいと考えている人が多く、かつ地域内のほとんどの農家が営農組織へ加入していました。そこで、米を農家自らが作りたいという希望を侵害せずに、大豆などの転作作物を中心に集積を図ることにしたのです。その後、米

Q せっかくのほ場整備。その後、耕作放棄が進まないようにするには、どうすればいい?

A これまでせっかく守ってきた農地が耕作放棄されて、全国的に問題になっているといます。このことを考えると、ほ場整備事業は農地保全に始まって農地保全に終わると言っても過言ではないと思います。私たちの場合は「農事組合法人づくり」の立ち上げに成功したことで、将来におけるほ場管理の不安を、ほぼ払拭できたと確信しています。

Q 農事法人を設立したことでどんな効果が生まれませんか?

A 私たちの地域は、ほとんどが稲作中心の兼業農家です。そのため以前は春や秋のシーズンになると、会社勤めのかたわら、土日は否応なく農作業に没頭しなければならなかった。しかし、今は、ほ場管理を営農組織に任せられるようになったことで、時間的な余裕が生まれました。

づくりも営農組織に任せられた方が効率良いと思いはじめの人が増え、今では米作りについても農地集積が穏やかに進んでいます。

2番目は、農事組合法人の発足と大きな関係があります。基幹3作業だけで農地集積を図るには、当地区の現状では無理がありました。その問題をクリアするには、法的な人格を持ち、農家個々と直接利用権設定ができる組織が必要不可欠でした。そこで農事組合法人づくりを設立し、認定農業者の資格を取り、利用権の設定を直接農家と取り交わせるようにしました。

3番目は「地産・地消」の取り組みによる収入確保とそれによる担い手育成です。水土里ネット大和ではJAと一帯に、平成12年ごろから地元の小中学校の給食に地元産の米や果物を使ってもらう地産・地消の取り組みを始めていました。この考え方を進めたのが「ふらっと大和」という施設です。そこでの毎週の朝市はとても盛況なのですが、問題は利益率が低いことです。そこで今後加工施設を整備しようということになっていますが、消費者に商品をどう消化して欲しいのかという意識が、売る側にもっと必要です。例えば地場産の食材を使った料理が食べられる食堂を設置するか、さまざまなアイデアを生み出して、わがまちに誇れる「ふらっと大和」にしたいと思っています。

農村部の振興や地域づくりに、ほ場整備事業は欠かせないものです。ぜひ今後もしっかり捨てないで欲しい。都市型の政策ばかりに重点を置いては、日本の今後の食料問題や地域社会の維持に解決の糸口はないと思います。

講演記録

村の原風景を 取り戻せ

日本では今、田畑の荒廃が全国的な問題になっています。水源かん養機能や豊かな生態系の源など、農業のもたらす多面的機能が改めて注目される中、自然豊かな農村の風景を取り戻すにはどうすればいいのか。ナベツルの里で知られる周南市八代をふるさとにもつ、NPO法人歴山会の福田礼輔理事長の講演からご紹介します。

NPO法人 歴山会
理事長 福田礼輔
(講演より要旨抜粋)

農は国の大本

守護大名内氏の祖先は、百済の琳聖太子だといわれています。韓国では「百済文化祭」という大きな祭りがあり、それを見に行ったときに私が一番驚いたのは「農は国の大本」と書かれた大きな幟を立てて登場した農民の団でした。それを見て私は旧制中学時代、先生からよくその言葉を言われていたことを思い出したのです。「農業なくして、国は成り立たない」と。最近ではこの言葉をあまり聞かなくなりましたが、韓国では農業に対する心構えが残っているんですね。そういえば韓国の農村は日本ほど荒廃しておらず、今でも牛で耕作する風景が残っています。

子規も危惧していた 日本の食の未来

作家の司馬遼太郎が書いた評論の中に、四国から東京へ出てきた正岡子規が夏目漱石に会ったときの話が書かれています。子規が「青田を渡る風にそよぐ苗の美しさはすばらしい」という話を漱石にしたところ、漱石は米が苗からできる稲の実であること知らなかったというのです。さらに驚いたことには、手伝いに来ていた女性が筒を見て「これはだれが作っているものなんですか」と聞くので、子規が「筒は作るものでなく、生えてくるものだ。竹になるんだ」と教えたというのです。そうした会話から子規は考えます。これから文明が進むと、田舎も東京のようになっていくんじゃない

か。そうしたことを明治の中頃に子規はすでに危惧していたというんですね。そしてその危惧は今、どんどん進んでいます。

日本初の自然保護条例は 八代のツル

今は周南市となっている旧熊毛町八代村で私は生まれました。昭和15年、私が6年生だったときに、八代に飛んできたナベツルを数えたことがあります。同じ時間に各集落でみんな数えたところ、352羽いました。その頃、鹿見島にいたのは30羽くらいです。

先日、ナベツル保護についてのシンポジウムがあり、私も出席しました。かつてナベツルは日本全国にいたものです。でも、毛利藩でもナベツル2羽を將軍の食事に献上したという記録が残っているように、ツルは狩猟でどんどん捕獲され、やがて本州では八代村という山間地だけに残り、八代の人たちは愛情からツルを守るようになっていきました。

実は、明治初年の八代には今と同じように10数羽しかいませんでした。ところが、明治16年にある事件が起こります。というのは、吉敷村の猟師が八代に来てツルを撃ち、それを知った村民たちが怒って、猟師への傷害事件にまで発展してしまったのです。そのことが問題になって明治22年、当時の県知事が「八代村のツルを撃つべから

ず」という県条例を制定します。実はこれが日本における自然保護条例の第1号で、山口県は自然動物保護の先進県だとも言えるかもしれません。ちなみにこの県知事は面白い人で、同じ年にふぐ解禁令の県条例も出しているんです。県条例制定後、八代のツルは増え、大正8年には100羽を超え、国の特別天然記念物に指定されます。これは新潟県のトキと同じく鳥類の天然記念物の第1号でした。

八代のツルはなぜ 減っていったのか

しかし、八代のツルはその後300羽まで増えたものの、次第に減少していきました。なぜ減っていったのか。エサの不足だとかいろいろいわれられていますが、私はツルの「ねぐら」が失われたからだと思うのです。ツルのねぐらは、禿げ山です。かつて、八代盆地の周辺は砂地の禿げ山で、ツルはそこに寝ていたのです。ツルはシベリアのように広い原野でないと眠れない鳥キツネやタヌキなど野獣を恐れ、集団で寝るのです。

ところが戦後、国全体に禿げ山一掃のスギ・ヒノキの植林政策がとられ、八代からも禿げ山が消滅してしまいました。ツルは今、山の間の小さな田んぼに寝ています。10羽程度の小さなねぐらです。周辺は雑木林。そんな怖いところにツルが寝られるわ

けがありません。やはりツルを増やそうと思えば、ねぐらを整備しないといけないと思うのです。

また、今はモミをまいてツルを一カ所に集めています。私が子どものころは村全体がツルの遊び場でした。今のようない田んぼではありません。田んぼにはモミが落ちていました。それに八代は山間の寒冷地です。湿地が多かった。私たちは冬、氷の張った田んぼで滑って遊び、氷の下にはドジョウやタニシがいっぱいいて、ツルはそれも食べていました。村全体が餌場だったのです。ところが土地改良によって立派な耕作田になりました。そうしたこともツルが減少していったひとつの問題があると思います。

八代には今、休耕田や荒廃田がたくさんあります。それらをもう一度湿地にして、田んぼの学校、めだかの学校にしてはどうでしょうか。そうした工夫を通じて自然を取り戻したい。

でも、休耕田の活用には難しい問題があるようですね。補助金政策の一端かもしれませんが、日本の農業は今、枠にはめられすぎていてはいませんか。

農村の活性化のために 見直すべきこと

ドイツでは戦後、村落の改善を真っ先に手掛けたといえます。また、フランスは自



俳句だけでなく、子どもたち自身が撮った写真からも素直な感動が伝わってきます。写真は、地元在住の写真愛好家重永さんに見ていただいたそうです。

ホームページはこちら

<http://www.city.shunan.yamaguchi.jp/hp/shikumasho/sikphoto/index.htm>

click!

方も協力。子どもたちは、俳句教室の皆さんと一緒に地域を歩いて吟行に挑戦すると同時に、心が動いた風景を見つけるとその場で撮影。子どもたちはその写真にそれぞれ自慢の1句を添えてポストカードを作成し、学校のホームページで発信したほか、公民館だよりにも紹介され、ユニークな活動は地域の話題に。子どもたちにとって俳句づくりは、自然豊かなふるさとの魅力を見直す機会となり、地域の人たちとのふれあいにもつながった貴重な体験となったようです。

作品は現在、同小学校のホームページで公開中です。ぜひご覧ください！

周

南市郊外、山あいに美しい棚田の風景が広がる四熊地区。四熊小学校ではその自然豊かなふるさとを俳句に詠み、それにデジタルカメラで写した写真を添えて、ホームページを通じて発信するユニークな取り組みを行っています。子どもたち一人ひとりの個性が光る四熊小学校5・6年生5人の楽しい作品の数々をご紹介します。

地域は大きな学校！

周南市立四熊小学校は、永源山公園から鹿野方面へ車で約10分の地にあります。平成16年度の全校児童は14名。小学校と地域との行事は比較的多い一方で、子どもたちは最近、地域で活動することが少なくなっていました。

そこで、同小学校では「地域は大きな学校」ととらえ、積極的に地域に出て学習する活動を展開していると考え、その中で生まれたのが、俳句と写真を通して地域のよさを再発見しようという取り組みでした。その活動には地域の公民館の俳句教室の皆さんや地元の写真愛好家の

大根が畑の中で冬を待つ
寛



四熊小6年 山本 寛君

もみじの葉
赤黄緑
芸術だ
寛



空気がきれいで緑が多いです。地域の方とのふれあいが多く、楽しい行事もたくさんあります。おだい様も88ヶ所あり、歴史のあるものがたくさんあります。

はげのなけ
おろすのかけ
優樹

今の四熊は自然がたくさんあるので、このまま四熊の自然を大切にしたいです。これからは、僕たちが四熊の自然を守っていきます。



四熊小6年 峯重優樹君

ふるさとを俳句で詠み、デジタルカメラで写して、発信しよう。

周南市立四熊小学校の取り組み

四熊フォトエキシビジョン

Photo exhibition

風の方向
分かつたよ
優樹



ススキの穂
風の力で
おじぎする
貴大



四熊小6年 酒井貴大君

台風で強い
木を倒す
貴大



食料・環境・ふるさと写真コンテスト(児童・生徒の部) 最優秀作品 (P.8に掲載)

あけびだよ
種がいっぱい
食べれない
食卓
淳史



小道咲く
彼岸花
ぼる見だ
ぼる見だ
淳史



四熊小5年 小田淳史君

この四熊は自然がいっぱいです。川づりがいつでもでき、とっても楽しいところです。

山里は
強いな
賢一



四熊小5年 小田賢一君

モーター
台風被害
大賢一



品目	出荷時期(月)												出荷量	主な産地	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
キャベツ														4,922t	山口市・宇部市
白菜														2,805t	萩市(旧福栄村)・山口市
ダイコン														5,170t	萩市(旧むつみ村)・阿武町
レンコン														334t	岩国市・由宇町
タマネギ														3,889t	山口市・萩市
白ネギ														85t	防府市・下関市
青ネギ														123t	山陽小野田市(旧小野田市)・萩市(旧三隅町)
ハウレンソウ														603t	美祿市・阿武町
ブロッコリー														639t	萩市・山口市
はなっこりー														83t	山口市・宇部市
ナス														1,086t	下関市・周南市(旧熊毛町)
トマト														1,845t	萩市(旧むつみ村)・阿東町
キュウリ														758t	宇部市・萩市
ピーマン														154t	徳地町・萩市(旧むつみ村)
カボチャ														148t	阿知須町・宇部市
レタス														191t	下関市・山口市
グリーンアスパラガス														19t	下関市・山陽小野田市(旧小野田市)
ニンジン														19t	山口市・萩市(旧福栄村)

(注)出荷量は全農山口県本部の平成12年4月～13年3月の取扱実績。 ■ 最盛期 ■ 出荷期

温州ミカン														8,728t	周防大島町
夏ミカン														343t	萩市
スイカ														1,599t	萩市・長門市
イチゴ														1,033t	下関市・山口市
メロン														191t	萩市(旧むつみ村・旧福栄村)
ブドウ														29t (523t)	周南市(旧徳山市)・山口市
ナシ														1,906t	秋芳町・下関市(旧豊北町)
リンゴ														6t (944t)	阿東町

(注)出荷量は全農山口県本部の平成12年4月～13年3月の取扱実績。()内の数字は平成12年農林統計の数値で、観光・直売が大半を占める。 ■ 最盛期 ■ 出荷期
※参考文献「旬のやまぐち農産物」見つけて! やまぐち農産物愛用推進委員会

やまぐちの農産物
ピックアップ5

Hanakkori



1 はなっこりー

はなっこりーは中国野菜のサイシンを母、ブロッコリーを父として、山口県農業試験場で開発された山口県オリジナル野菜。平成7年から本格的に市場に出始めました。主な栽培地は山口市や下関市などですが、人気の高まりと共に年々県内各地に栽培の輪が広がっています。茎や花蕾もまるごと食べられ、おひたし・ベーコン巻き・天ぷら・浅漬けなど、料理法は多彩。歯触りがよく、甘みもあることから、子どもたちにも好評です。

2 みがきたまねぎ

Migaki tamaneagi



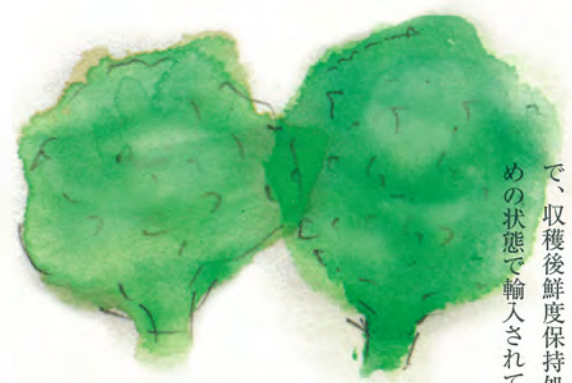
昨年、東京の「県外販売協力店」のスーパーで販売されて、北海道産などの他県産をしのぐほど大好評を博した山口県産の「みがきたまねぎ」。手作業で一つ一つ丁寧に磨かれた高糖度な貯蔵たまねぎです。特に新たまねぎは生のままスライスして食べると、そのおいしさがよく分かります。加熱すると、辛みが和らぎ、甘さが増します。5月下旬～2月上旬が出荷時期です。

旬の野菜暦

やまぐちの野菜シリーズ

Broccoli

3 ブロッコリー



ビタミンCがレモンの2倍近くもあるブロッコリーは、緑黄色野菜の代表選手。選び方のコツは、緑の濃いもの、切り口がみずみずしいものを選ぶこと。蕾の開きかけているもの、黄色いものは味が落ちます。県内最大の産地・萩市の出荷時期は11月上旬～3月。日本での栽培が難しい6月～9月頃のブロッコリーはほとんど輸入物で、収穫後鮮度保持処理されたものが氷詰めの状態で輸入されてきます。

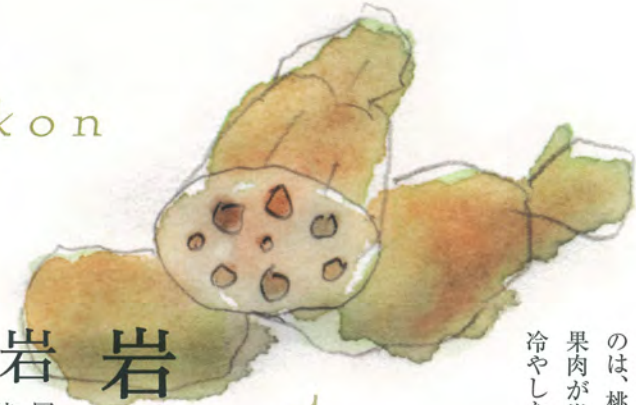
Tomato



4 トマト

県内最大のトマト産地は、旧むつみ村高俣。完熟堆肥を用いた徹底した土づくりに積極的な取り組みで、平成5年には朝日農業賞を受賞。平成15年にはトマト部会全体で農薬や化学肥料をおおむね30%減らす技術を導入した「エコファーマー」に認定されました。同地で主に作られているのは、桃太郎エイト等。味は甘くてジューシー。果肉が崩れにくいのが特徴で、氷水でよく冷やしたトマトの味は最高です。

Renkon

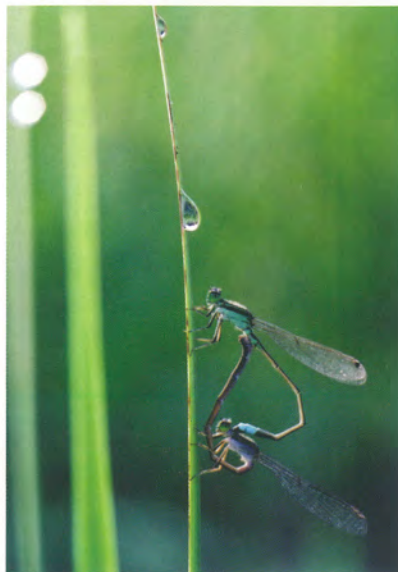


5 岩国れんこん

岩国れんこんは、山口県を代表する伝統野菜の一つ。享保年間に岩国市愛宕の村本三五郎氏が藩主吉川公の命を受けて「備中種」の種れんこんを持ち帰ったのが始まりとされています。岩国れんこんは、太りが良く、柔らかく、味が良いことで知られ、近年は減化学農薬・減化学肥料による栽培も行われています。ちなみに平成15年産のれんこん生産量を見ると、山口県は全国3位。その8割を岩国産が占めています。

のんた Photo Column vol.7

Nonta



次の世代へ伝えたいものがあります。

それは、

数多あまたの生命を育み

幾世代もの生命をつないできた

豊かな自然

みどりなす山々

澄みわたった空気

さらさらと流れゆく清流

草萌ゆる大地

風渡る波穏やかな海

かけがえのない地球の宝を

未来を担う子どもたちへの贈りものに。

発行

食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議 事務局

〒753-0079 山口県山口市系米2丁目13番35号 水土里ネット山口 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL083-933-0033 FAX083-933-0048